

日本語&日本文化体験

1. 到達目標

日本で就職するためには、日本社会や日本人との人間関係への適応力をつけなければならない。そのためには日本語の特質や日本人の生活様式を肌で感じ、それらを理解する必要がある。そこで、今までの日本留學生活の中での体験を題材とし、そこから何を学んだかを発表することを通じ、理解を深めることを目的とする。

2. 講義内容

別紙参照（2種類：1年用&2年用）

3. 弁論内容（1年）

別紙参照

4. 研究内容（2年）

別紙参照

5. 1年「日本語弁論大会」効果検証

（1）日本語弁論大会参加者数

1年生 37名

（2）調査結果

別紙参照

（3）目標到達状況（弁論大会を顧みて担当講師が判断）

目標を達成できた 17名

不十分だが及第点 15名

できていない 3名

（4）検証（採点基準は別紙採点表参照）

①所要時間（5点満点）

5点 26名

4点 10名

3点 1名

0～2点 0名

37名中26名が5分以上の弁論を行なった。そして10名が4分台、1名が3分台であった。途中で止まった場合はタイマーも止めたので、ほぼ正味の時間の測定をしている。人前でしゃべる経験の少ない学生がほとんどであることを考慮すれば、十分な結果である。

②テーマ（5点満点）

4点 14名

5点 18名

3点 5名

0～2点 0名

日本人が日頃気付かないたくさんテーマが発表された。例えば、

- ・韓国人が食事で一番大切にしている要素は滋養強壮（日本では料理も見た目の美しさが重要）だから、韓国では食用犬が存在する
- ・日本発“オタク文化”の変遷と外国への影響
- ・出された料理を全部食べようとする日本人と残そうとする中国人は、ともに相手に感謝を表わしている
- ・日本では中年男性の自殺が多いが、中国では若い女性が多い理由
- ・日本の外来語は元の言語の意味とかなり違う
- ・韓国では冠婚葬祭時でも伝統衣装を着る人はほとんどいない
- ・尖閣諸島を中国の領土だと思っている中国の若者は少ない
- ・結婚のお祝金は日本では奇数金額だが、台湾では偶数金額が常識
- ・中国語の漢字と日本語の漢字では全く意味の異なるものがある
 - 「勉強する」⇒中国語では「無理をする」の意
 - 「大丈夫」⇒中国語では「大人」の意
 - 「汽車」⇒中国語では「車」の意

- ・“割り勘”が良いと思っているのは日本人くらいだ

他にも、日本人の人間関係の希薄さに違和感を覚える内容の弁論を多く耳にした。例えば、

- ・自宅に友人を招くことはほとんどない
- ・電車内で老人や体の不自由な方に席を譲ろうとする人はほとんどいない

などである。

③展開（5点満点）

5点 4名

4点 19名

3点 14名

0～2点 0名

すべての弁論がそれぞれの学生の体験に基づく内容であったので、聞き手としては大変興味深かった。しかし、中にはテーマと内容がずれていたたり、関連性の薄いものがあつたのが残念であった。

④テクニック（4点満点）

4点 7名

3点 14名

2点 14名

0～1点 2名

今回の弁論大会では、できるだけ聴衆に語りかけることを課題の1つとしたため、原稿から目を離し、しゃべっていた学生には3点以上の点数をつけた。そして、さらに工夫が見られた学生は4点とした。逆にほとんど原稿に目をやり、前を見ていない学生は話し方に工夫が見られても2点、ただ原稿を読むだけの場合は1点とした。その意味では過半数の学生が3点以上取れているので、成果があったといえる。

⑤質疑応答（1点）

質問に対して的確に答えていたので、全員1点とした。

(5) 1年「日本語弁論大会」における今後の課題

①日本人学生への国際化教育

日本で「グローバル教育」が叫ばれて久しいが、ここに来て日本人学生の国際化への意識の低下が問題になっている。留学生を受入れる側の学生が魅力的でなかった場合、いくら指導者が国際化の重要性を説いても留学生の心に響くはずがない。同世代の学生同士の交流こそが将来の国際的な友好関係を築くことができる。日本は今まで「世界から学ぶ」ための教育をしてきたが、今はもうそういう時代は過ぎ去り、「世界に発信する」教育が求められている。

②プログラムの目的の浸透

今回の「日本語弁論大会」を開催するにあたり、留学生にその目的をしっかり理解させたつもりであったが、事後アンケートを見ると期待したほどの成果が見られなかった。その対策が次の③④である。

③アイコンタクトの徹底

今回事前に説明した準備方法、つまり原稿を作成するのではなく、話の展開を箇条書きにして構成や流れ、強調点をメモする程度にして、壇上ではそのメモを確認しながら、出来るだけ聞いている人に語りかけるようにすることになっていたが、それが徹底できなかつたので、来年はそれをさせたい。

④聴く側の態度

今回の「日本語弁論大会」の目的の中に、「他の人の弁論から新しい情報を出来るだけ多く収集すること」があったが、それがうまくできなかった。来年はそれを徹底するために、聞いている留学生も審査員としてお互いを審査させる方法を取りたい。当然採点表に弁論内容記入欄を設けるつもりである。

⑤全校行事とし、多くの日本人に聴いてもらう

今回でこの「日本語弁論大会」が十分見るに耐えられるものであることがわかった。来年は是非より多くの先生や日本人学生に見ていただくための場面設定をしたい。

6. 2年「研究レポートA」効果検証

(1) 「研究レポートA」提出者数

2年生 12名

(2) 調査結果

別紙参照

(3) 目標到達状況（「研究レポートA」を読んで担当講師が判断）

目標を達成できた 5名

不十分だが及第点 4名

できていない 3名

(4) 検証

①課題1（日本語に関する問題への取り組み）について

本校入学当時、日本語学校で習った日本語と日常生活で実際に使われている日本語の違いに戸惑った学生が多かったようだが、学校内外で日本人と会話する機会が増えるにつれて、徐々に慣れていったようだ。

また、日本の漢字にも慣れ、繁体字や簡体字で書く学生はほとんど見られなくなった。

②課題2（日本人との人間関係や生活習慣の違いへの対応）について

母国の人々との違いから、「日本人に見習いたい」という意見よりも「日本人はおかしい」という意見のほうが圧倒的に多かった。この原因は2つある。ひとつは留学生が日本人と深くつきあうといった経験を持てなかったこと、もうひとつは日本人が外国人から見習われるような行動をとっていないことが挙げられる。

ただし、それぞれの留学生が母国と日本の違いについてしっかり認識できていること、“郷に入れば郷に従え”という考え方が身についていることは何よりの救いである。

以上